

苦難の中の信仰と愛

フィリピを出発したパウロとシラスは、エグネチア街道を西に進みマケドニアの首都テサロニケに行った。パウロが訪れた当時は人口は12万を越えた大都会であった。ユダヤ人も多く、そこには会堂もあった。このテサロニケで使徒パウロ一行は「ユダヤ人主流派」のは激しい反対運動に直面した。

反対派にとって、十字架にかけられた人が神の約束されたメシアであると説くパウロの教えは神を冒瀆する異端であり、それによってユダヤ人社会を混乱させる危険人物であると思われた。そこで彼らは、町の広場にたむろする人々を抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させた。それからヤソシの家を襲いパウロとシラスを民衆の前に引っ張り出そうとした。パウロとシラスはかろうじて難を逃れたが、反対運動が激しくなったため、テサロニケの兄弟たちは、これ以上危険がパウロに及ばないようにと、シラスと共に、夜の間に次の町ベレヤへと送り出した。

ベレヤはテサロニケから南へ約60マイル(約100キロ)。そこにはユダヤ人が多数住んでおり、会堂もあった。そこで、いつもの通りパウロとシラスは会堂に入って、福音を伝えた。ルカはこう記す、「このユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた」。その結果、多くのユダヤ人が福音を受け入れキリスト者になった。それだけでなく、さらに貴婦人を含む多数のギリシャ人も信仰に入った。こうしてベレヤにもキリストの教会が誕生した。

ところがそこでもまた騒動が起こった。テサロニケのユダヤ人主流派の熱狂的反対運動はベレヤまで及んだ(13節)。彼らはそこにも押し掛けて来て群集を煽動して騒ぎを起こし、またもや彼らを社会騒乱罪で告訴しようとした。パウロの身の危険を感じたベレヤの信徒たちは、パウロを伴って東の海辺の港に急ぎ、そこから船でアテネまで導いて行かねばならなかった。

使徒パウロのヨーロッパ伝道は困難を極めたが、聖霊の恵みある働きにより、その困難な中で、マケドニアの地(フィリピ、テサロニケ、ベレヤ)にキリスト者の群れ(教会)が出来た。生まれたばかりの教会はその後どうなったか。パウロの後の書簡からそれぞれの教会の姿を見ることが出来る。

マケドニアの教会から学ぶ第1のことは、苦難の中で成長していく教会の姿である。異教社会の中で最初のキリスト者たちは様々の反対と迫害に直面しながら信仰に生き教会を建て上げていった。苦難の中で教会は成長し、マケドニア、アカヤ地方の諸教会の模範となるのである。パウロは、あなた方こそ私たちの誉れであり、喜びであり、望みと喜びと誇りの冠である、とまで書いているのである(第1テサロニケ2:19参照)。

第2にマケドニアの教会から学ぶことは、苦難の中での信仰と愛の成長である。フィリピ、テサロニケ、ベレヤの教会は、信仰において成長したばかりでなく、愛において感動的なほど成長した教会になる(第2コリント8:1~7を見よ)。彼らは苦難の中で<信仰において><愛において>成長した。この信仰と愛——これが教会の2つの柱である。信仰とは、神との正しい関係に生きること、愛とは、隣人との正しい関係に生きることである。この信仰と愛において教会は建てられ、この信仰と愛において教会は豊かにされ、この信仰と愛において教会は成長していく。